

琉球大学学術リポジトリ

ハワイ沖縄県系人の日本語学習意欲と目的に関する 一考察：沖縄留学という観点から

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2015-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山元, 淑乃, 金城, 尚美, Yamamoto, Yoshino, Kinjo, Naomi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30954

【研究論文】

ハワイ沖縄県系人の日本語学習意欲と目的に関する一考察：

沖縄留学という観点から

山元 淑乃*・金城 尚美**

**A Study of motivation and purpose of Japanese language learning
for Okinawan descendants in Hawaii:
Through a perspective of study abroad in Okinawa**

YAMAMOTO Yoshino* and KINJO Naomi**

要旨

本研究は、ハワイ在住の沖縄県系人に焦点を当て、日本語学習意欲と学習目的、留学に対する意識、沖縄文化に対する関心度を調査することにより、沖縄県系人にとっての日本語学習ニーズ、継承言語または外国語としての日本語学習の位置づけ、沖縄文化に対する興味と留学希望との係わりを明らかにし、沖縄県系人の沖縄留学促進のための課題を探った。アンケート調査により、世代の推移に伴い日本語運用能力の低下がみられる反面、日本語学習や沖縄留学に対する意欲は若い世代の方が高くなる傾向があるという結果が得られるとともに、今後の沖縄留学促進に向けた課題が浮き彫りになった。

Abstract

This paper examines the motivations and purposes of Okinawan descendants in Hawaii to learn the language and culture of Okinawa and Japan in correlation with their level of Japanese language proficiency and generational differentiation. The analytic results of the questionnaire survey reflected several interesting aspects of Okinawan descendants' motivation. Despite the younger generations of

* 琉球大学留学生センター講師 Associate Professor, International Student Center, University of the Ryukyus.

** 琉球大学留学生センター教授 Professor, International Student Center, University of the Ryukyus.

Okinawan descendants having a lower level of Japanese language proficiency as compared with the older generations, the younger generations show higher motivations in learning the Japanese language. We also consider the reason why the number of Okinawan descendants who come to study in Okinawa has recently decreased and a way to promote students' exchange between Okinawa and Hawaii.

1. 研究の背景

沖縄からハワイへの移民の歴史は、1899年に26名の契約移民がハワイへ渡航したことに始まるとされる。公益財団法人海外日系人協会の2013年の資料における在外日系人数を見ると、ブラジルの約150万人に次いで、米国は約130万人と2番目に多く、そのうち沖縄県系人の占める割合は8%で、約9万7千人にのぼる（2010年度推計値 沖縄県交流推進課）。

このように移民を数多く送り出している沖縄県は「ウチナーンチュ子弟留学生受入事業」として沖縄県出身移住者子弟に対して奨学金を支給し1年間の招聘留学プログラムを実施しているが、国ごとに招聘枠が設けられている中で、ハワイは米国本土とは別に定員枠があり、1993年から2009年の間に27名が留学している（国際交流人材育成財団2013）。しかしながら、2010年以降はハワイからの同プログラムによる留学生はいない状態が続いている。また琉球大学はハワイ大学と国際交流協定を締結しており、短期交換留学プログラムの留学生を募っているが、2007年以降ハワイ大学からの留学生の受け入れは交流可能人数の5名に満たないことが多く、ハワイを留学先として希望する日本人学生が多い状況と対照的であり、双方向の交流という観点からは不均衡な状態が続いている【琉球大学総合企画戦略部国際交流推進課 [online: studentexchange2014.32.pdf](http://online.studentexchange2014.32.pdf)】。

ハワイは移民の社会であり、特に沖縄とのつながりのある沖縄県系人が多く居住しているにもかかわらず、沖縄へ留学する学生の数が伸びないのはなぜなのだろうか。橋尾（1999）の調査によると、沖縄県系人2世で沖縄への旅行経験が2回以上あるという回答が70歳代で70%、60歳代では65%であり、2世は沖縄への親近感が高かったとされている。現在移民2世は高齢化し、県人会の中心となって活動しているのは3世で、多くの4世や5世が青少年期を迎えている。このような世代の推移に伴い日本語離れが進んでいるとされるが、移民の子弟達は実際に日本語や日本文化、沖縄文化に興味を持たなくなったのであろうか。日本や沖縄への留学自体に魅力がなくなったのであろうか。これらの疑問を発端に、本研究では、ハワイにおける沖縄県系人の日本語学習目的、日本留学や日本語

学習に対する興味や学習意欲、日本文化または沖縄文化への興味についての実態を探り、日本語学習や沖縄留学の促進につなげるための示唆を得ることを目的に調査を行った。沖縄にとっての人的財産である県系人の沖縄留学を促進することは、グローバル人材の確保を急務とする沖縄にとって、有効な対策の一つとなり得ると考えられるからだ。

2. 先行研究

2-1. ハワイの日本語学習者を対象とする調査研究

Schmidt & Watanabe (2001) は日本語を含む5つの外国語を学習する2,089名のハワイ大学の学生を対象に、第二言語学習への動機づけについて量的な調査を行い、動機づけ、教育的嗜好、学習ストラテジーの関連を調べ、動機づけの中の「value (言語学習の有用性)」という因子が教育的嗜好と学習ストラテジーに最も大きな影響を与えたとした。さらに日本語学習者は、他の言語の学習者より言語学習への動機づけが強い一方、学習言語の習得の難度の高さに対する認識から学習成功への期待が低いことなどが指摘されている。また、「heritage (継承)」という因子は動機づけに特に影響を与えていないとしているが、この調査の「日本語学習者」の中にどの程度日系人が含まれるかは明らかではないため、日系人のみを対象にした調査が必要であると考えられる。

ハワイにおける日系人の日本語学習については、Kimi Kondo-Brownの一連の研究が詳しい。Kondo-Brown (2001) は145人のバイリンガル継承語学習者 (bilingual heritage students) について、日本語との接触状況や使用頻度、動機づけなどをレベル別に調査し、上級クラスでは他に比べ日常生活での日本語接触と使用が多いこと、母親の言語選択が調査対象者の言語行動に大きく関係していること、継承言語や文化への態度は静的ではなく、年齢 (学年) とともに興味が高まることなどの結果を明らかにしている。また、全レベルの学習者に道具的 (instrumental) 動機と統合的 (integrative) 動機があるが、日本への旅行や留学への興味は低いという (Kondo-Brown 2001)。

2-2. 米国在住の沖縄県系人の日本語力

1990年以降、およそ5年に一度、沖縄県の主催により、主に海外移民者とその子孫たちが移民母県である沖縄に集って交流をする「世界のウチナーンチュ大会」というイベントが開かれている。琉球大学の研究グループは、第4回、第5回の同大会参加者を対象とするアンケート調査を行った。2006年の第4回大会参加者4,932名の居住国は、北米が39%、ハワイが22%と、アメリカ合衆国が6割以上を占めていた (野入2009)。2011年

の第5回大会でも、参加者 7,363 人中、中北米が 25%、ハワイが 15%と、高い比率を占めた。参加者数から、ハワイ沖縄県系人の沖縄への関心、帰属意識が強いことがうかがえる。しかしながら、同大会の全参加者を対象とした日本語能力についての野入（2008）の分析によると、ハワイ州の参加者の日本語能力は相対的に低く、日常会話のレベルまで含めて日本語を話せる人は、ハワイ州では 31%だが、その他の合衆国と全体では 44~45%であり、ハワイの沖縄県系人の凝集力が日本語以外のものによって支えられていると推測されている。

2011 年の第 5 回大会における、全アンケート回答者を対象にした調査結果によると、日本語が「全くできない、もしくは挨拶程度」、「聞き取れるが話せない」という回答の比率が 51%に達している。世代別に見ると（表 1）、同じ回答の比率が 2 世で 52.1%、3 世で 74.1%と、世代の推移に伴って、日本語を前提としたコミュニケーションが成り立たなくなっていると言える。

表 1 沖縄系移民 世代別日本語能力 (n=474) (人)

	まったくできない。もしくは、挨拶程度	日常の会話を聞き取れるが、話すことができない	日常の会話で話したり聞いたりできる	日本語で不自由なく議論できる	無回答	合計
1 世	11	8	27	86	2	134
2 世	38	36	53	14	1	142
3 世	84	39	30	9	4	166
4 世	17	5	4	3	0	29
5 世	2	1	0	0	0	3
合計	152	89	114	112	7	474

『第 5 回世界のウチナーンチュ大会 報告書』（2012）沖縄県

2-3. 日本語の学習目的に関する調査研究

国・地域別の日本語学習者数を見ると、2012 年調査時点で米国は 15 万 5,939 人で全体の 3.9%、世界第 5 位である*1。日本語を学ぶ目的は、1970 年代頃までは日本研究のためという回答が多かったが、1980 年代以降の日本語学習ブームで、日本語を習得してビジネスチャンスや雇用機会の拡大を狙う学習者が増加した（国際交流基金 2013; p.73）。日本のバブル経済破綻以降は日本語学習ブームが終息し、近年はアニメやゲームなどサブカルチャーや現代文化への強い関心を学習のきっかけとした日本語学習者が増えており（リンゼー 2003）、日本研究やビジネスなどの実学的志向以外に、学習目的の多様化が進んでいる。

2002 年の世界各国における日本語学習者を対象とした調査によると、在外日系人数の最も多いブラジルの学校以外の機関では、日系社会の日本語教育ニーズを反映し、「母語または継承語である日本語を忘れないようにすること」や「父母の希望」が日本語学習の目的として意識されており、その傾向がアメリカとカナダの日系社会でも見られることが

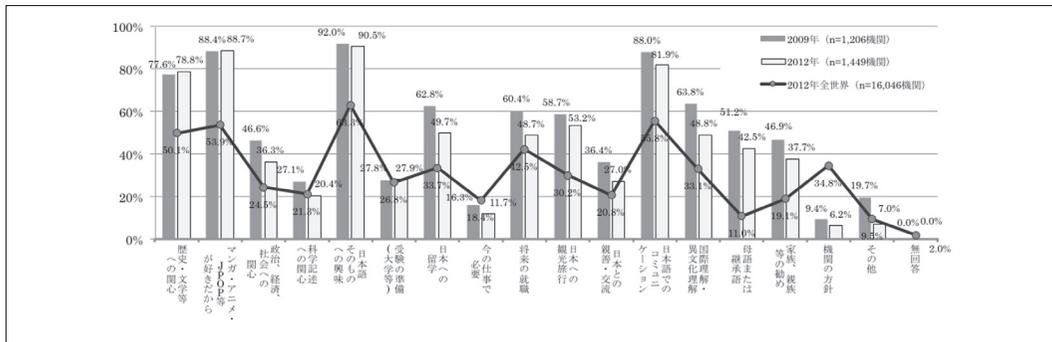


図1 日本語学習の目的 国際交流基金（2013:72）

報告されている（国際交流基金 2003:12）。2006年の調査では、米国での在留邦人や国際結婚の家庭の増加にともない、「母語または継承語である日本語を忘れないようにすること」、「父母の希望」との回答が比較的多かったという（国際交流基金 2008:13）。国際交流基金（2013）による米国における調査結果を見ると、日本語を「母語または継承語として学ぶ」と回答した人の割合は42.5%と半数を割っており、前回調査の2009年時点での51.2%と比較すると、明らかに減少している（図1）。

以上のような調査結果から、時代の推移に伴う社会状況の変化や世代の交代が日本語学習にも影響し、沖縄からの移民が多いハワイでも日本語学習目的が変容を遂げていると推察される。

3. ハワイにおける沖縄県系人に対する調査

3-1. 調査の概要

2013年8月31日と9月1日に行われた「ハワイ沖縄フェスティバル」*2会場内の文化テントにおいて、無記名自記式質問紙によるアンケート調査を行った。沖縄フェスティバルはハワイでは広く知られた催しであり、普段は県人会の活動などに参加しない沖縄県系人も多く訪れ、多様なデータが収集できると考えたからである。研究参加者の選定条件は、ハワイ在住の沖縄県系人の2世から5世、14歳以上50歳以下とした。研究参加者は、会場を訪れている来場者で、あらかじめ設定された条件を満たしていると見られる対象者を選ぶというストリートキャッチ方式を用いた。質問項目は、性・年齢・職業などの基本属性、沖縄訪問経験の有無、日本語学習経験、日本語運用能力、日本または沖縄への留学希望や目的などで構成された。

3-2. 研究参加者

アンケート調査の結果、76名から回答を得、調査協力者としての条件を基準に73名の回答を有効回答とし、分析のためのデータとした。調査協力者の内訳は表2のとおりである。

「県人会の活動に参加するか」という質問に対し、「よく参加する」と答えた調査協力者は全体の約12%のみであり、約50%が「あまり参加しない」、「参加しない」と答えていることから、ハワイ沖縄フェスティバルの一般性の高さがうかがえ、本研究のデータは、73名と十分な数ではないながら、ハワイの多様な沖縄県系人の姿の一面を、ある程度捉えることができるのではないだろうか。

表2 研究参加者の属性(人)

	2世	3世	4世	5世	合計
男性	6	9	13	1	29
女性	3	10	28	3	44
合計	9	19	41	4	73

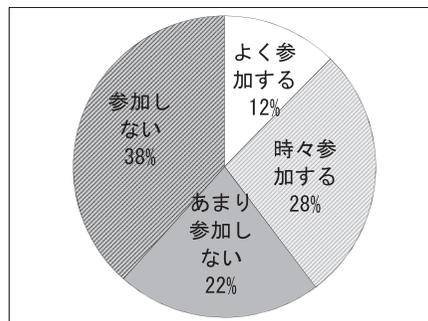


図2 県人会の活動への参加頻度

3-3. 倫理的配慮

研究参加者には研究の目的と趣旨、研究協力は研究参加者の自由意思であること、匿名性の保持を厳守することを、文面と口頭で説明した。研究によって得られたデータは匿名性を保持し、厳重な保管後、安全な方法で破棄することとした。

3-4. 分析方法

データの分析にはフリー統計分析ソフト「R on windows」(version 3.1.1) (R core team 2012) を使用した。Rはフリーソフトウェアであるが、ベースとなるS言語、R言語については世界的に利用されており、その信頼性も高く、医学系論文で解析結果を掲載する上で全く問題ないとされている [対馬 online: RとR コマンダー.html]。サンプル数が73と100以下であることから、統計にはフィッシャーの直接確率検定を行い、有意差の検討を行った。

4. 調査結果

4-1. 来沖経験

沖縄への訪問経験があると答えた人は25名で、約34%であった(表

表3 各世代グループの来沖経験

	2世 (n=9)	3世 (n=19)	4~5世 (n=45)	合計 (n=73)
来沖経験あり	7(78%)	8(42%)	10(22%)	25(34%)
来沖経験なし	2(22%)	11(58%)	35(78%)	48(66%)

3)。世代グループ（2世・3世・4～5世）と来沖経験（あり・なし）についてフィッシャーの直接確率検定を行ったところ、世代による来沖経験の偏りは有意であり（ $p<.05$ ）、世代の推移に伴い来沖経験者が少なくなっていることがわかった。

4.2. 日本語学習経験と学習目的

日本語を学んだことがないとした回答は73名中8名のみで、約90%がなんらかの日本語学習経験を持っており、世代間の差はみられなかった。また学習経験を持つ人に学習方法をたずねたところ、高校で学んだという人が80.3%と最も多かった。家庭内で日本語を学ぶ機会は6%と少なく、日本語が家庭での意思疎通の手段にはなっておらず、日本語を継承語としてではなく外国語として学んでいる実態がうかがえる。

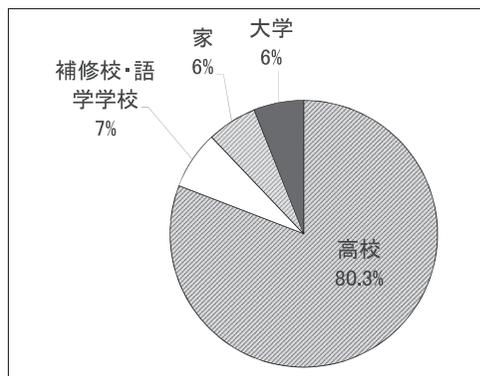


図3 日本語学習経験

さらに学習目的について自由記述による回答を求めたところ、「コミュニケーション」、「文化の継承」、「旅行」といった回答の他、「単位取得」という回答も多かった。高校で日本語を学んだと回答した人が8割を超えることから、「単位取得」のために日本語を外国語科目の一つとして学んでいることが、この結果からも明らかになった。また、「アニメファンだから」、「字幕なしでアニメをみたい」という回答もあり、日本のポップカルチャーへの接触を契機として日本語学習を始める人も少なくないことがわかった。

4.3. 日本語運用能力

日本語の運用能力を問う質問に対し、「できない」または「挨拶程度」と答えた人は全体で39名、53%であった（表4）。移民1世の両親または祖母とある程度の接触があると考えられ

表4 世代別グループの日本語運用能力

	2～3世 (n=28)	4～5世 (n=45)	合計 (n=73)
日常会話に不自由ない	11(39%)	8(18%)	19(26%)
聞き取れるが話せない	3(11%)	12(27%)	15(21%)
できない・挨拶程度	14(50%)	25(55%)	39(53%)

る2～3世、あまり接触の機会がないと想定される4～5世の2グループに分けてフィッシャーの直接確率検定を行ったところ、日本語運用能力に世代グループ間の有意差はなかったが（ $p<.10$ ）、「日常会話に不自由ない」レベルの運用能力については4～5世が明らかに2～3世より低いことがわかった。これは、世代の推移に伴って日本語力が下がるとす

る野入（2012）の研究結果と同様である。この結果は、2～3世は家庭で親または祖父母との日本語によるコミュニケーションの機会があったが、4～5世では学校での外国語科目としての日本語学習に留まっているためであると考えられる。

4.4. 日本語の学習意欲と日本語運用能力

「日本語を上達させたいと思うか」という設問に対し、「とても思う」・「ややそう思う」と答えた人は全世代合計で71人と97%を占め

表5 世代別グループの日本語学習意欲
：日本語を上達させたいと思うか

	2世 (n=9)	3世 (n=19)	4～5世 (n=45)	合計 (n=73)
とても思う	6(67%)	7(37%)	30(67%)	43(59%)
ややそう思う	2(22%)	12(63%)	14(31%)	28(38%)
あまりそう思わない	1(11%)	0(0%)	1(2%)	2(3%)

（表5）、全体的に日本語学習意欲があることがわかった。世代差があるかどうかを調べるためにフィッシャーの直接確率検定を行ったところ、世代の推移に伴い日本語運用能力が下がるという結果とは逆に、世代が若い方が学習意欲は高くなるという傾向が見られた ($p<.05$)。

日本語運用能力と学習意欲について（表6）、日本語が「できない・挨拶程度」と答えた日本語運用能力無し群を一つのグループとし、「聞き取れるが話せない」と「日常会話に困らない」と

表6 日本語運用能力と日本語学習意欲
：日本語を上達させたいと思うか

	できない・挨拶程度 (n=39)	聞き取れるが話せない・日常会話に困らない (n=34)	合計 (n=73)
とても思う	19(49%)	24(71%)	43(59%)
ややそう思う	20(51%)	8(24%)	28(38%)
あまりそう思わない	0(0%)	2(6%)	2(3%)

と答えた日本語運用力有り群を一つのグループとし、二つのグループの間に差があるかを見るためにフィッシャーの直接確率検定を行ったところ、有意であった ($p<.05$)。つまり、日本語が「できない・挨拶程度」と回答した「日本語運用能力無し群」は、「日本語運用能力有り群」よりも学習意欲が低いことが明らかになった。

4.5. 沖縄留学への関心

「沖縄に留学して日本語を学びたいか」という質問に対し「とても思う」または「そう思う」と回答した人は63名（86%）で

表7 世代別グループの留学希望
：沖縄に留学して日本語を学びたいか

	2世 (n=9)	3世 (n=19)	4～5世 (n=45)	合計 (n=73)
とても思う	6(67%)	9(47%)	27(60%)	42(58%)
ややそう思う	1(11%)	6(32%)	14(31%)	21(29%)
あまりそう思わない	2(22%)	3(16%)	4(9%)	9(12%)
全くそう思わない	0(0%)	1(5%)	0(0%)	1(1%)

あり（表7）、世代間の有意差はなかった（ $p>.05$ ：フィッシャーの直接確率検定）。

これに対し「沖縄に留学して沖縄文化を学びたいか」という質問については、50名（68%）が「とてもそう思う」と答えており、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせた人数は67名（92%）

表8 世代別グループの留学希望
：沖縄に留学して沖縄文化を学びたいか

	2世 (n=9)	3世 (n=19)	4～5世 (n=45)	合計 (n=73)
とてもそう思う	8(89%)	9(47%)	33(73%)	50(68%)
ややそう思う	1(11%)	6(32%)	10(22%)	17(23%)
あまりそう思わない	0(0%)	3(16%)	2(4%)	5(7%)
全くそう思わない	0(0%)	1(5%)	0(0%)	1(1%)

と、日本語に対する学習意欲よりも沖縄文化に対する学習意欲の方が強いという傾向がみられた（表8）。世代間の有意差はなかった（ $p>.05$ ：フィッシャーの直接確率検定）。

一方、希望する日本の留学先については、沖縄県と明確に回答した人は28名で38%と低く、「沖縄以外」と回答した人は15%、「わからない」と回答した人は47%と最も多かった（図4）。沖縄県系人だからといって、沖縄への留学を強く希望しているとは言えないことが明らかになったが、これは、「沖縄に留学して日本語や沖縄文化を学びたいか」という質問に8割以上が肯定的に答えているという結果（表7・表8）とは一見矛盾している。選んだ希望留学先について理由や目的の自由記述回答を求めているが、そこには「他府県のことをまだよく知らないから」、「沖縄にはもう行ったことがあるので違うところを見てみたい」という回答が多くみられたことから、「沖縄に留学して学びたい」という希望もある一方で、沖縄文化を学ぶ機会はハワイにもあることから、留学先を選ぶ段になると、他府県の「まだ知らぬ場所」という選択肢も大きく視野に入れて考える意識がうかがわれる。

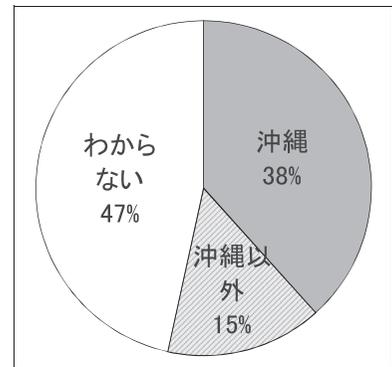


図4 希望する留学先

4-6. 沖縄アイデンティティ

野入（2012）は、第5回世界のウチナーンチュ大会参加者を対象に行った「自分自身をウチナーンチュだと思うか」という質問の回答によって、沖縄アイデンティティについて分析している。質問に対し、「とてもそう思う」・「ややそう思う」と答えた割合は回答者全体のうち83.2%と高く、対象を沖縄県系人だけに絞ると、同じ回答の比率は94.2%とさらに高くなったという。野入（2012）はこの調査の対象が、世界のウチナーンチュ大会参加者という、沖縄への渡航費を賄うことができる経済的に余裕のある階層の、さらに沖

縄にやってくるだけの熱意をもった人々であるためデータに偏向があるとし、現地社会での調査では異なる結果が出る可能性を示唆している。

そこで本研究における調査でも同じ

質問をしたところ、「とてもそう思

う」・「ややそう思う」と答えた人数

は 63 名 (86%) であり、野入 (2012)

の結果とほぼ同様の高い割合であった。

世代グループ、日本語運用能力、学習

意欲による差を調べるために、フィッシャーの直接確率検定を行ったところ、いずれにも有意な偏りは見られなかった ($p>0.1$)。したがって、沖縄アイデンティティが強いからといって、日本語運用能力や学習意欲が高いとは言えないことがわかった。

表9 沖縄アイデンティティ
: 自分自身をウチナンチュだと思うか

	2世 (n=9)	3世 (n=19)	4~5世 (n=45)	合計 (n=73)
とてもそう思う	8(%)	9(%)	33(%)	50(%)
ややそう思う	1(%)	6(%)	10(%)	17(%)
あまりそう思わない	0(%)	3(%)	2(%)	5(%)
全くそう思わない	0(%)	1(%)	0(%)	1(%)

5. 考察

今回の調査により、ハワイでの沖縄フェスティバル参加者という、少数ながらも一般性の高いデータから、ハワイの沖縄県系人の現在の日本語の学習経験、学習目的、学習意欲、日本留学に対する意識などについて、示唆に富む結果が得られた。

まず日本語運用能力については、先行研究の結果を踏襲し、ハワイにおいても家庭内の日本語使用が減り、日本語を外国語と位置づける世代が増え、日本語運用能力が低い日系人が増えていることがわかった。ダグラス・知念の調査によると、アメリカでは日本からの移住者が多く住んでいたハワイ、カリフォルニアなどの州に継承日本語学校が集中していたが、戦時中に日系米国人が強制収容されたことにより閉鎖され、当時の日系社会に対する言語・文化への弾圧とあいまって、2世の日本語の喪失が急速に進んだという [ダグラス・知念 online: usreport3_07.pdf]。戦後になって継承日本語教育は再開されたものの、日本語を喪失した2世が3世、4世になるにつれて日本語を使用しない家庭が増えたことにより、日本語を話さない若い世代が増加したと考えられている。今回の調査ではこのような若い世代の多くが高校で単位取得を目的に、継承語ではなく外国語として、日本語を学んでいる現状が浮き彫りになった。

では日系人に日本への興味がなくなると言えば、そうではない。沖縄県系人に関しては、本調査の結果により、運用能力が世代の推移に伴って低下している反面、学習意欲は世代が進むにつれ高くなるという傾向がみられた。「文化継承」や「祖父母とのコミュニケーション」を目的に日本語を学んだ人も少なくはなかった。しかし、Schmidt & Watanabe

(2001) が出した「heritage (継承)」という因子が言語の学習動機づけに特に影響を与えていないという結果は、ハワイにおける沖縄県系人にも合致する可能性が高いだろう。世代交代に伴い、日本とのつながりの強弱、日系人としての意識の高低が生まれることは想像に難くない。それに加えて時代や社会状況の変化が影響し、日本語学習目的も多様化したと考えられる。国際交流基金(2013)は、日本のポップカルチャーが世界的に浸透し、日本・日本語への興味・関心の入り口となってきたと分析している。本調査の結果でも「アニメ」をきっかけに日本語学習をはじめたとする回答がみられ、ポップカルチャーに対する興味が、学習意欲や動機に影響を及ぼしている状況がうかがえた。

日本語が「できない・挨拶程度」と答えた人は、「聞き取れるが話せない」「日常会話に困らない」と答えた人よりも学習意欲が低いという結果から、ある程度の運用能力がつけば、それに伴って学習意欲も高くなることが推測できる。つまり、たとえ「単位取得」を目的に始めた学習でも、そこでコミュニケーション能力が習得できれば、学習意欲を持続できる可能性があると言えよう。このことから、高校などでの日本語教育が漢字や文法の学習に偏るのではなく、コミュニケーション能力を伸ばすことを重視する必要性が示唆される。

本調査の結果、世代の推移に伴い、来沖経験が少なくなっていることがわかったが、世界のウチナーンチュ大会の参加者の世代別内訳を見ると(第5回世界のウチナーンチュ大会実行委員会2012)、1世と2世が52%と全体の半数以上を占めていることから(図5)、若い世代ほど来沖する機会が得られていないことがうかがえる。そのため、若い世代ほどチャンスがあれば、沖縄を訪問したり留学したりする可能性は高いとも考えられる。

ブリティッシュ・カウンシルによる、1万人余りの学生を対象とした調査結果によると、米国人学生の留学希望先ランキングの上位3位は英国(19%)、フランス(10%)、イタリア(8%)の順となっており、日本は5%で7位と上位に入っている[Dow Jones & Company online: 中国はわずか1%—米英学生の希望留学先—WSJ.html]。しかし、米国人学生の海外留学意欲はこの1年で低下し、留学に興味があると答えた学生の割合は1年前の56%から44%に低下した。米国で「大学教育にかかる費用が増加し続けていること」への懸念も留学意欲低下の一因となっているようだ。したがって、魅力的なプログラムの開発とともに、奨学金などの経済的な支援や、単位互換を円滑にし、留年せずに卒業できる制度を整える

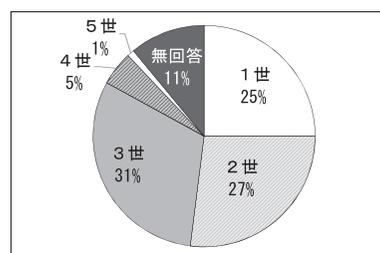


図5 第5回世界のウチナーンチュ大会参加者の世代別内訳
第5回世界のウチナーンチュ大会報告書 (p.129)

ことも重要な課題である。沖縄県系人に関して、本研究の調査結果からも、機会があれば留学して日本語や日本文化について学びたいという希望があることがわかった。しかしながら、特に沖縄が留学希望先とはなっていない実態も明らかになった。これまでに沖縄に留学していた沖縄県系人に話を聞くと、ホームステイや旅行で一度沖縄を訪問し、留学を考えるようになったという声を聞くことが少なくない。沖縄県系人を対象とした数週間のサマープログラムなど、留学の契機となるような機会の提供も検討していく必要があるだろう。また、沖縄留学で日本語よりも沖縄文化の学習を希望する人の割合が高かったことから^{*3}、沖縄文化の学習に焦点を当てたプログラムの開発も必要だと考えられる。さらに、Kondo-Brown (2001) は、ハワイ大学の学生を対象とした調査から全てのレベルの日本語学習者に道具的 (instrumental) 動機と統一的 (integrative) 動機があるが、日本への旅行や留学への興味は低い (p. 450) という結果を導いていることから、今後は日本留学で得られるメリットをアピールしていく必要性もあるだろう。そのため具体的なニーズを調査し、魅力のあるプログラムの開発に努める必要がある。例えば、将来の就職につながるようなインターンシップ制度を整え、社会に出るための経験が積めるようなプログラムが考えられる。琉球大学では、2年前から夏季にインターンシップ・プログラムを開設し実績を積んでいることから、今後もこのプログラムの発展に務めつつ、さらに可能性を模索していきたい。

6. 今後の研究課題

本調査は73名と少ないデータ数であったため、今後はより多くのデータを収集して分析し、今回得た結果を確認していくことが必要である。また、個々人の学習動機に影響を与える要因や、動機の変容、留学経験が学習者各々の人生に与える影響などについては、量的研究から計り知ることはできない。詳細な聴き取りを行い、そのインタビュー・データを質的に分析することにより明らかにしていく必要があるだろう。その際、「日系人」といったある意味ステレオタイプ的な単純なとらえ方は適切ではなく、特に沖縄県系人の言語を中心としたエスニック・アイデンティティーを支える要素と、日本語学習や留学に焦点を当てた研究の必要性と重要性が注目される。

アンケート終了時に、沖縄県による沖縄への招聘留学や、琉球大学への奨学金のついた短期留学の可能性があるかどうかを回答者に質問したところ、ほぼ全員が「知らなかった」と答えた。今後は情報周知に一層の努力をし、沖縄留学を促進し、優秀な人材の育成に貢献したい。

謝辞

本研究は琉球大学平成 25 年度宮里政玄アメリカ研究奨励基金の支援による成果である。

回答に協力してくださったハワイ沖縄フェスティバル参加者の皆様、ご支援をいただきましたハワイ大学沖縄研究センター（Center for Okinawan Studies）、統計分析についてご助言下さいました琉球大学教育学部道田泰司教授に、厚く御礼を申し上げます。

【注記】

- 1) 日本語学習者の国・地域別の 2012 年調査時点で米国の学習者数は全体の 3.9%、15 万 5939 人と世界第 5 位となっている。
- 2) ハワイ沖縄フェスティバルは、ハワイ沖縄連合会（Hawaii United Okinawa Association）の主催で、毎年夏に 2 日間にわたって行われる大規模なイベントである。ハワイにおける沖縄文化継承を目的として 1971 年に始まり、現在では例年 2 日間でのべ 5 万人が来場するハワイ最大のエスニック・フェスティバルに成長した。ステージでは空手の型や琉球舞踊などが披露され、会場内には沖縄伝統工芸の展示ブース、沖縄物産の販売コーナー、沖縄料理の屋台などが出される。2013 年は第 31 回目を迎えた。
- 3) 金城宏幸（2009）は、ウチナーグチと芸能・文化との結びつきが密接であることから、ウチナーンチュにとっては、ウチナーグチこそ沖縄文化を理解するための重要な鍵として大切に継承され、ウチナー・アイデンティティー形成の重要な要素となっていると分析している。

【引用および参考文献】

- 伊藤雄志（2014）「ウェリントン・ヴィクトリア大学の日本語学習者の学習動機と日本語教育実習生（チューター）の役割」『琉球大学留学生センター紀要』第 1 号，1-12，琉球大学留学生センター
- 金城宏幸（2009）「ウチナーンチュの越境的ネットワーク化と紐帯-「チムグクル」を運ぶ言語的文化」『移民研究』6，83-98，琉球大学移民研究センター
- 鉦塚賢太郎（2009）「世界のウチナーンチュ大会と沖縄県系人ネットワーク（6）-「ウチナーンチュ」の越境的な移動の経験差と沖縄社会への対応-」『移民研究』5，51-66，琉球大学移民研究センター
- 国際交流基金（2013）『海外の日本語教育の現状 2012 年度日本語教育機関調査』国際交流基金 くろしお出版
- 国際交流基金（2011）『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査 2009』国際交流基金 日本語教育支援部企画調整チーム

- 国際交流基金（2008）『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査 2006 改訂版』国際交流基金
日本語教育支援部企画調整チーム
- 国際交流基金（2005）『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査 2003』国際交流基金 日本語教育支援部企画調整チーム
- 第5回世界のウチナンチュ大会実行委員会（2012）『第5回世界のウチナンチュ大会報告書』沖縄県（DVD）
- ダグラス昌子・知念聖美「アメリカの継承日本語教育」『「アメリカにおける日本語教育の過去・現在・未来」（Japanese Language Education in the U.S. - Past, Present and Future）』, 1-29 <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/pdf/usreport3_07.pdf>（2014年11月30日）
- 知念聖美・リチャード・G・タッカー（2006）「米国における継承日本語習得：エスニックアイデンティティと補習授業校との関係」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』(2), 82-104, 母語・継承語・バイリンガル教育研究会（MHB研究会）
- 対馬栄輝「RとR コマンダー」<<http://www.hs.hirosaki-u.ac.jp/~pteiki/research/stat/S/>>（2015年2月4日）
- 野入直美（2008）「世界のウチナンチュ大会と沖縄県系人ネットワーク（2）—参加者の〈声〉に見るアイデンティティと紐帯の今後—」『移民研究』4, 97-115, 琉球大学移民研究センター
- 野入直美（2009）「世界のウチナンチュ大会と沖縄県系人ネットワーク（4）—中南米からの参加者の特徴を中心に—」『移民研究』5, 27-40, 琉球大学移民研究センター
- 野入直美（2012）「構築される沖縄アイデンティティ —第5回世界のウチナンチュ大会参加者アンケートを中心に—」『移民研究』8, 1-22, 琉球大学移民研究センター
- 橋尾直和（1999）「ハワイ日系人の言語と文化に関する意識(1)—沖縄系日系人二世の調査を中心に—」『文化論叢』vol. 1, 1-17, 高知女子大学
- 山本進（1997）「ハワイ大学の日本語教育について」『日本語・日本文化』23, 135-157, 大阪大学
琉球大学総合企画戦略部国際交流推進課「交流協定大学との学生交流実績（交換学生受入・派遣）」<<http://w3.u-ryukyuu.ac.jp/gakusaibu/kokusai/wp-content/uploads/studentexchange2014.32.pdf>>（2014年11月30日）
- リンゼー・アムソール・四倉（2003）「米国における日本語教育の現状および学習者動機について」『第10回国際シンポジウム:環太平洋地域における日本語の地位』実施報告, 国立国語研究所<http://www.ninjal.ac.jp/archives/event_past/kokusai_sympto/10/03/03-03/index.html>
- Dow Jones & Company 「中国はわずか1%—米英学生の希望留学先」<<http://jp.wsj.com/news/articles/SB10001424052702303709304579529261510726816>>（2014年11月30日）
- Kondo-Brown, K. (2001). Bilingual heritage students: Language contact and motivation. In Z. Dornyei Q R. Schmidt. (Eds.), Motivation and second language acquisition (pp. 425-452). Honolulu, HI: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii.
- Kondo-Brown, K. (2009) Heritage background, motivation, and reading ability of upper-level postsecondary students of Chinese, Japanese, and Korean. Reading in a Foreign Language, 21, 179-197.

- R Core Team (2012) *A Language and Environment for Statistical Computing*. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.
- Schmidt, R. & Watanabe, Y. (2001). In Z. Dörnyei & R. Schmidt (Eds.), *Motivation and second language acquisition* (Technical Report #23). Honolulu, HI: University Hawai'i, Second Language Teaching & Curriculum Center.
- Tse, L. (1998) *Affecting affect: The impact of heritage language programs on student attitudes*. In S.D. Krashen, L. Tse, & J. McQuillan (Eds.), *Heritage language development*, 51-72, Culver City, CA: Language Education Associates.